

C04a 科学史資料としてのプラネタリウムの保存・展示について

井上毅（明石市立天文科学館）、嘉数次人（大阪市立科学館）、毛利勝廣（名古屋市科学館）

プラネタリウムは機械工学、レンズ光学、電気工学の技術の粋を集結させ、星空を再現する光学装置である。1923年にドイツで天文教具として開発され、日本では1937年に大阪市立電気科学館に東洋初のプラネタリウムとして設置された。その後、時代とともに数は増えていき、現在では国内に300を超えるプラネタリウムが設置され、多くの市民が天文学を学ぶ場となっている。

近年、光学式のプラネタリウムとは別に、コンピュータで作り出した映像を投影するデジタル式の装置が普及してきている。デジタル式プラネタリウムは自由度が高く極めて優秀な天文シミュレータであるが、美しく本物に近い星空の再現能力では光学式が優れており、両者を併用している施設が多くなっている。

現在、プラネタリウムの歴史は節目の時期にあるといえる。移行期には往々にして従来の古い機器を廃棄することが多いが、プラネタリウム施設においては古くなった機器にも価値を認め、保存や展示する例が見られている。我々は、現時点で、各地に存在するプラネタリウム機器類を保存し、経緯などの記録を残しておくことが、後に天文教育史、科学技術史を考証する際に重要な資料になると考える。

そこで、全国の古い光学式のプラネタリウムの保存や展示の状況について調査を行ったので報告する。また、天文教育の立場から、歴史を重ねた機器の保存の重要性を述べたい。